

論文概要書

能と注釈書——その古典世界をめぐる——

神田 裕子

「第一章 能の文学的基盤——伊勢物語古注釈の世界」では、能作品を生み出した、重要な文学的基盤の一つである、伊勢物語古注釈書の世界について論じた。

「第一節 伊勢物語注釈書に関する先行研究」では、伊勢物語注釈書の先行研究について概説する。「伊勢物語」は、延喜五年（九〇五）の「古今集」成立以前にその最も古い部分が作られ、最低でも五十年以上の歳月を経て増補されつつ成長増益を続け、成立した（片桐洋一校注『伊勢物語』（明治書院、一九七一年））。鎌倉・室町時代においても愛読され、「伊勢物語の世界」はさらに展開し、拡大されていく。「伊

勢物語」の解釈が、絵巻などのかたちで視覚的に展開する一方で、「伊勢物語」の文学的解釈を母体としながら、新たな説話群も形成していく。それが伊勢物語注釈書の世界である。「伊勢物語」と能との影響関係を考えるにあたっては、「伊勢物語」そのものというよりは、そうした伊勢物語古注釈書の世界との関連を想定する必要がある。時には作品の主題として、時には作品の修辭の一部として、能は「伊勢物語の世界」を享受した。多種多様な伊勢物語注釈書の中でも、能との関わりが最も密接なもの、冷泉家流伊勢物語古注の系統のものである。本論文では、冷泉家流伊勢物語古

注の原型がどのようなもので、どのように展開していくか、を叙説した。

「第二節 冷泉家流伊勢物語古注の原型」では、河野美術館蔵『伊勢物語註冷泉流』を取り上げる。大津有一『伊勢物語古註釈の研究』（増訂版、八木書店、一九八六年）の中で、冷泉家流伊勢物語古注の中で最も古い年記の奥書を有する本として、青谿書屋旧蔵『伊勢物語注』と大津有一氏旧蔵『伊勢物語註冷泉流』の二本が挙げられているが、これらは、現在のところ、所在不明である。河野美術館蔵『伊勢物語註冷泉流』は、冷泉家流伊勢物語古注の中で最古の奥書を有する、同種注中唯一の完本である。奥書には、「本云／于時正応四年へ一二九一」四月十九日／定家之余風相伝如右」とある。冷泉家流伊勢物語古注諸本中、内容的にも古体であるとされてきた「十卷本伊

勢物語注」と比較する。「十卷本伊勢註」は鎌倉時代には成立し、一条兼良の時代には広く流布していたとの先学の見解があるが、『伊勢物語註冷泉流』は、その「十卷本伊勢註」よりもさらに前に成立し、おそらくは冷泉家流伊勢物語古注の原型に近いものであるといえる。宮内庁書陵部蔵の『伊勢物語抄』は、河野美術館蔵本そのものではないとしても、同種のことを祖本とし、「十卷本伊勢物語注」を校合本として用いた可能性が高いと考える。冷泉家流伊勢物語古注は河野美術館蔵本を基本的なかたちとしながら、増補され改訂され数多くの諸本が作られていくのである。

「第三節「十卷本伊勢物語注」について――伝二条為兼筆冷泉家流伊勢物語抄」では、「十卷本伊勢物語注」についての考察を行った。「十卷本伊勢物語注」の性質

について考えるための手がかりとして、「伝二条為兼筆冷泉家流伊勢物語抄」と称される古筆切を取り上げる。この古筆切は、先行研究によって、「為兼の真跡とは認め難いようであるが、書写年代は元弘二年（一三三二）、建武中興の前夜の動乱中に没した為兼の時代はあると思われる。」「十三世紀後半のころの書写とするのが妥当であろうか。」とされている。

「伝為兼筆切」は断片的な物であり、それぞれの所蔵者も異なるため、かつては全体像を把握することが困難だった。だが、近年古筆切の影印・翻刻が刊行され、容易にその内容を知り得るようになった。また、佐々木孝浩氏が所蔵されていることをご本人から伺ったことに加え、偶然、京都の古書肆にて、筆者も一葉購入することができたため、原本を手に取りながらの調査が実

現した。「伝為兼筆切」は、本文内容も、推定される書写年代も、「十卷本伊勢物語注」の原本のかたちに近いものであった可能性を提示した。

「第四節 冷泉家流伊勢物語注の末書――伝心敬筆伊勢物語注」については、大津有一氏旧蔵「伝心敬筆伊勢物語注」を取り上げた。伊勢物語注釈書研究史において、「伝心敬筆伊勢物語注」は、大津有一『伊勢物語古注釈の研究』で取り上げられて以来、あまり顧みられることなかった注釈書であるが、本論文において、二つの観点からの重要性を指摘することができる。伊勢物語注釈書研究の観点からすれば、「伝心敬筆伊勢物語注」には、冷泉家流伊勢物語古注の末書としての特質が備わり、同時に、しかるべき典籍を忠実に引用するという旧注的な注釈態度

も見られ、旧注の注釈態度の萌芽としてとらえるべきであり、注目すべきものである。そして、冷泉家流伊勢物語古注の原型ともいえる、『伊勢物語註冷泉流』の内容を継承しつつ、後の『伊勢物語奥秘書』や徳江元正氏蔵『伊勢物語註』といった冷泉家流伊勢物語注の末書へと展開していく点を考慮しても、「伝心敬筆伊勢物語注」が、冷泉家流伊勢物語注の系譜において重要であることは、いうまでもない。また、能楽作品研究の視点からみても、世阿弥作である可能性の高い、能〈柏崎〉〈班女〉〈松風〉〈玉水〉といった作品と、主題および修辭において一致が見られるということは、注目すべきことである。〈玉水〉と第百十九段注の事例のように、能の作品全体の構想と注の内容が一致するということが、そして〈柏崎〉〈班女〉〈松風〉の中の断片的な

修辭が一致するということが、両者は次元の異なることである。だが、これらの作品が世阿弥によって創られたものであるならば、世阿弥の伊勢物語についての理解と、近接した伊勢物語の理解を反映させているものが、「伝心敬筆伊勢物語注」であると考えられる。

「第一章 能の文学的基盤——伊勢物語古注釈の世界」においては、伊勢物語注釈書の中でも、能への影響関係が重要視される、冷泉家流伊勢物語古注の諸本とその展開について、私見を述べた。

「第二章 世阿弥の能と伊勢物語の世界」では、第一章で取り上げた伊勢物語注釈書と、世阿弥の能がどのような関わり方をしたか、考察した。

「第一節 能と伊勢物語古注釈書の関連についての先行研究」では、伊勢物語古注

釈書と能の影響関係を考察した先行研究について、略述した。

「第二節 〈井筒〉と伊勢物語注釈書」では、多くの「伊勢物語」を題材とする能の中で、最高傑作である〈井筒〉について論述した。「(i) 〈井筒〉に見られる先行文学からの影響」の項では、『古今和歌集』ならびに古今集注釈書、「知頭集」末書『伊勢物語次第条々事』、『伊勢物語注冷泉流』とを比較し、影響関係について言及した。「(ii) 能〈井筒〉の水鏡」の項では、能〈井筒〉のクライマックスともいえる、シテが水鏡を見る所作が、鎌倉時代から継承されてきた、「伊勢物語」の伝統的な第二十三段の絵の図柄を、世阿弥が、能〈井筒〉において表現した可能性を考慮すべきであることを指摘した。「(iii) 世阿弥の独創性」の項では、伊勢物語注釈書や「伊勢

物語」関連資料、その他の先行文学に見出されない、能〈井筒〉の重要な要素三点（・能〈井筒〉の場面を、秋の月のある夜としていうこと。・業平が紀有常娘に、冠と直衣の形見を残すということ。・子供ではなく、成人した紀有常娘が、それらに身に着けて、水鏡を見るということ。）に論究した。近年、冷泉家流伊勢物語古注の解釈に従って「伊勢物語」第二十三段を読み替えたり、有常の息女像を能〈井筒〉のシテに投影させる必要はない、必ずしも能〈井筒〉を中世古注釈書の理解の反映とみなす必要はない、といった意見が数人から示されている。だが、本論文で掲げたように、中世古注釈書を精査することなしに、能〈井筒〉における世阿弥の創造性について考えることは、不可能である。

「第三節 番外曲〈玉水〉と伊勢物語注

釈書」は、世阿弥作の可能性の高い番外曲「玉水」についての考察である。上掛・下掛謡本諸本の本文異同を調査し、上掛・下掛のいずれが古態であるか、私見を述べた。また、「玉水」が「伊勢物語」を本説とし、その「伊勢物語」についての理解が、主として大津有一氏蔵「伝心敬筆伊勢物語注」と同種の注釈書に基づいている可能性について、論じた。「玉水」の詞章は、以下の三点（一、『申楽談儀』引用の詞章が下掛諸本と一致すること。二、「法華経を……」の和歌について、「拾遺和歌集」諸本のかたちと、下掛諸本のかたちが一致すること。三、玉水説話で男が女に渡す形見について、伊勢注その他の玉水説話がすべて「下帯」とし、下掛諸本も「下帯」として一致していること。さらに観世宗家蔵茶色表紙五番綴本も「下帯」としており、上掛諸本も本

来は「下帯」であつた可能性が高く、「玉水」が「下帯」と呼ばれていた時期もあるらしいこと。）から考えると、下掛諸本の詞章の方が古体をとどめているといえる。そして、以下の三点（・前ジテ後ジテが「伊勢物語」の和歌とともに登場すること。・橘諸兄の井出寺建立譚が、「冷泉家流伊勢物語注」に見られ、橘諸兄が井出寺に山吹を植えた話も、冷泉家流伊勢物語古注と密接な関係にある『毘沙門堂本古今集注』に見られること。・橘清友を主人公とする下帯説話が、大津有一氏蔵「伝心敬筆伊勢物語注」に見られること。橘清友の水鏡譚が、慶應本に見られることなど。）から、「玉水」は、「伊勢物語」を本説とし、冷泉家流伊勢物語古注、特にその末書である。大津有一氏蔵「伝心敬筆伊勢物語注」と同系統の伊勢物語注釈書にある如き理解に拠り

ながら書かれた作品であると考えられる。

「第四節 番外曲〈濡衣〉と伊勢物語注 釈書」は、『歌舞髓脳記』草稿の本論部と「三体和歌」題配当部に重複して曲名が挙げられている能〈濡衣〉についての考察である。以下三つのこと（・濡衣の亡女の詠歌二首を所収し、特に第二首「ぬぎきする……」の和歌のかたちが類似していること。・〈濡衣〉の中で踏まえられている二つの〈濡衣〉説話を両方とも所収し、海士が継子娘に海士の衣を着せるなどの、細かな表現に至るまで共通していること。・「十巻本伊勢物語注」が〈濡衣〉の成立時期とほぼ同時期に世間に最も広く流布していた冷泉家流伊勢物語古注であること。）から考えると、〈濡衣〉の作者は、冷泉家流伊勢物語古注の中でも特に、「十巻本伊勢物語注」と同種のものを参照した可能性がある

と言える。

「第二章 世阿弥の能と伊勢物語の世界」では、室町時代に成立した「伊勢物語」を題材とする十作の能の中から、現行曲〈井筒〉、番外曲〈玉水〉、〈濡衣〉を取り上げて、論じた。第一章で論考を行った冷泉家流伊勢物語古注が、能において、どれほど重要な役割を果たしてきたか、右三作品の事例をみただけでも、明瞭である。能の作者の創造性を考える上で、どこまでが「伊勢物語」についての同時代的理解で、どこからが能の作者の創造によるものであるか、区別することは、必須である。「伊勢物語」を題材とする能では、概して優雅な題材を扱うものが多いと言えるが、〈濡衣〉の如く一見して非世阿弥的な継子いじめ譚・人情ものの能が、冷泉家流伊勢物語古注によって、作られていることから、伊勢

物語注釈書は、能にとって特殊な題材ではなかったことがわかる。この点を踏まえつつ、能の最高傑作ともいうべき〈井筒〉について、能作者の中で、最も優れた才能を有した世阿弥の創造性を考えるにあたり、伊勢物語注釈書の照合作業は不可欠となるのである。

本章において、能作品と伊勢物語注釈書の照合の必要性の、少なくとも一面は提示することはできたと、考えている。

「第三章 能の注釈書と古典世界」は、文禄四年（一五九五）三月、関白豊臣秀次が山階言経達に命じて作らせた、百二番の能の注釈書「謡抄」と、下間少進の手によって成された能型付『童舞抄』の整版本についての考察である。

「第一節 「謡抄」と古典世界——紹巴注を中心に」では、「謡抄」の中で連歌師

里村紹巴（大永四（慶長七）一五二四）一六〇二）によつてなされた、和歌・日本古典関連の注釈をとりあげ、その性格について検討する。龍谷大学所蔵（写字台文庫旧蔵）『諷調鈔』は、本願寺の僧、丸山兮庵によつて、慶長三（五年頃）一五九八（一六〇〇）に書写されたものであるが、紹巴による注釈には「巴」と朱肩書が付いている。紹巴による注を収録する作品は九作、そして注の数は計七十ある。このうち、紹巴が和歌を注釈に引用している事例は注で、七箇所ある。紹巴が注釈として掲げる和歌は、勅撰集からの引用が四例、その他の歌集からの引用が一例、『六花和歌集』からの引用が二例ある。紹巴が伊勢物語注釈書を注釈に引用している事例は、四箇所ある。調査の結果、四箇所の内容は、鉄心斎文庫蔵『紹巴本伊勢物語付注』と一致し



た。紹巴は「謡抄」注釈の際に、自身の注だけでなく、細川幽斎の伊勢物語注釈、「伊勢物語闕疑抄」も用いている。

「第二節 古活字「謡抄」守清本の書誌学的研究」では、古活字本「謡抄」のうち、最古版である守清本を取り上げ、考察する。守清本の伝本のうち、安田文庫蔵本と国会図書館本の比較を行い、守清本の全容解明に向けて、一步を進めた。また、伊藤正義氏がかつて提示した、守清本の刊行時期を慶長五年頃とする推定について、検討した。調査の結果、初版（安田文庫本）刊行後、初版の誤植を訂正した再版丁を含む第二種本（国会図書館本）が刊行されたと考えられる。野上記念法政大学能楽研究所編『鴻山文庫蔵能楽資料解題 中』（野上記念法政大学能楽研究所、一九九八年。）の解題執筆者である表章氏の推測では、さらに覆

刻整版混在本が刊行されたということになるが、本調査では整版の丁を確認していない。「謡抄」の刊行が慶長五年頃とする伊藤氏の説に対する見解は、以下の通りである。慶長九年刊『徒然草寿命院抄』の平仮名活字は拙く、平仮名活字を併用した丁が少ない。それは、平仮名活字を作る技術や、それを用いる技術が未熟なことに起因すると考えられるが、この『徒然草寿命院抄』よりも、守清本「謡抄」が先行して刊行されたとは、考えにくい。守清本の書肆を推定する資料として、慶長八年（一六〇三）富春堂刊『太平記』がある。守清本が、ひらかなの「せ」に近い「セ」、「ー」に近い「ト」、「リ」に近い「リ」など、特徴のある活字を用いていることを、表章氏は指摘しているが、こうした活字は、「謡抄」だけでなく、慶長八年富春堂刊『太平記』

などにも、同様の活字が見受けられる。富春堂刊伏見版『東鑑』は、平仮名活字片仮名活字を併用していることも守清本「謡抄」と共通している。そうしたことから、富春堂は、守清本「謡抄」を刊行した書肆と何らかの関係があるのではないかと、考えている。

「第三節 古活字「謡抄」単辺十二行本の書誌学的研究」では、前節で述べた、古活字本「謡抄」守清本と密接な関わりがあると考えられる、単辺十二行本「謡抄」についての考察を行う。建仁寺両足院蔵本は、川瀬一馬『古活字版之研究増補版』（一九六七年）で初めて紹介された一本であるが、川瀬氏以後の研究ではいずれも「未見」とされており、詳細は不明であった。本論文をなすにあたり、この建仁寺両足院蔵本についても原本調査を行った。単辺十二行本

の収録曲目と編成は、伝本中、建仁寺両足院蔵本のもものが本来のものであろう。単辺十二行本の諸版は、守清本や多くの古活字本同様に、別版（補殖字版）が一部に混在する。本論文の調査結果を考えると、古活字守清本の初版（安田文庫本）刊行後、初版の誤植を訂正した再版丁を含む第二種本（国会図書館本）が刊行され、その後で単辺十二行本が刊行されたことになる。さらに、守清本改版増刷に際して、草書体ひらかな活字と楷書体カタカナ活字の併用を廃止し、全編を楷書体カタカナ活字に統一、行数も十一行から十二行に増やし、守清本収録の百二曲を、切りよく百曲にして刊行されたものが、単辺十二行本であると推定する。

「第四節 整版「童舞抄」の書誌学的研究―本能寺版古活字本との関連を中心に

―で取り上げる『童舞抄』は、能の型付としては最も早く刊行されたものである。『童舞抄』は、本願寺坊官で能役者として活躍した下間少進（天文二〇〇元和二一五五―一六一六）が慶長元年（一五九六）に著した、全三巻、能七十曲の金春座系型付である。現存の能型付としては、永正期の内容を伝える『禪鳳雑談』中の型付類に次いで古いものとされる。先行研究の時点で所在が確認されていなかった、金春家蔵整版『童舞抄』の存在を金春安明氏からご教示いただき、その調査が実現したことによって、整版『童舞抄』について以下の二点（・先行研究では、正保四年版『童舞抄』は「上製本に基づく忠実な覆刻本に相違ない」とするが、正保四年本には上製本と同版再摺の丁も含まれていること。・金春宗家蔵刊年不明上製本『童舞抄』と鴻

山文庫蔵寛永九年本『五音之能之心持之事』は、同じ表紙であること。また、料紙の質もよく似ていること。）が判明した。金春家蔵整版『童舞抄』の表紙ならびに見返し裏張りには、『前漢書』と『毛詩抄』の二つが用いられている。これらは、本能寺前町版古活字本『前漢書』（寛永五刊）と、同じく本能寺前町版古活字本『毛詩抄』（刊年不明）であることが判明した。金春宗家蔵『童舞抄』の表紙ならびに裏張りを調査した結果、以下三点（・金春本『童舞抄』は、『前漢書』刊行の寛永五年以後、さほど遠からぬ時期に刊行された。・刊年不明本能寺前町版古活字本『毛詩抄』は、『童舞抄』に先行して刊行されていた。・『童舞抄』の書肆、中嶋久兵衛と、本能寺前町版古活字本の書肆は密接な関係にあった。）が考えられる。

能の資料の出版は、能の享受史に大きな影響を与えたばかりでなく、近世の文化全体に影響を及ぼしたことは、まぎれもない事実である。しかし、その刊行事情の詳細は、まだ不明瞭な点が多い。近世初期の出版事情そのものが、まだ明らかでないところが多々ある。そうした現状の中で、本論文は能の領域にとどまらず、寛永期の書肆の相互関係にまで論が及んだ。能専門の書肆（山本長兵衛）が現れる以前は、能の資料も他分野の書籍と一括して取り扱われていたのだから、能の資料だけでなく、近世初期の出版事情を視野に入れた上で調査することは、欠かすことのできない過程だった。また、今後もそうした視野に立たなければ、その解明は不可能であろう。

「第三章 能の注釈書と古典世界」では、最古の能の注釈書「謡抄」について取り上

げ、江戸初期刊行の能楽資料の状況を伺い知るために、整版『童舞抄』について例示した。第一章で取り上げた伊勢物語注釈書を、作品の主題として、時には修辞の根拠として、能は創作されており、それについては第二章で述べた。そして、室町後期から江戸期にかけて、その能も古典となり、注釈書が作られるようになったのである。第一章、第二章、第三章と、本論文が述べてきたことによって、能の古典世界の様相を多少なりとも明らかに出来たのではないかと、考えている。

「第四章 能の芸能的基盤——宴曲の世界」では、能を生み出した、演劇的・音楽的な基盤としての先行芸能の一つである、宴曲（早歌）について叙説した。

「第一節 宴曲研究史概要」では、近代以後の宴曲研究について概説し、宴曲と

能の関係を考える上で踏まえておく必要のある史料を確認した。

「第二節 能と宴曲―金春宗家蔵『宴曲集巻第一』をめぐって」では、室町時代の能役者が宴曲と密接に関わったことをさらに裏付ける資料である、金春宗家蔵『宴曲集巻第一』について考察した。金春宗家本は、詞章と音楽表記、傍訓、濁点を完備しており、宴曲研究の立場から見ても、大変貴重である。金春宗家本の朱濁点を調査し、大東急記念文庫本と比較した結果、両本の濁点の付された箇所がほぼ一致することが判明した。先行研究において既に指摘されていることであるが、宴曲の詞章は、能やその他の文学作品とは異なり、諸本による著しい相違は見られない。諸本によって漢字や仮名遣いがまちまちであつても、耳で聞く際には諸本の異同がほとんどないとい

うことは、宴曲という歌謡の特色の一つである。清濁は、時には言葉の意味や解釈の相違をも生じさせるような、重要な事項であるが、宴曲は、詞章表記だけでなく、清濁にも異同がない歌謡である可能性がある。金春宗家本の朱書きは、宴曲の中興の祖である坂口盛勝坂阿の朱譜に、非常によく似ている。金春宗家本の書写年代は、冷泉家時雨亭文庫の一連の坂阿本が節付された、明德二年頃から、口阿の没した文安頃までの間と考えられる。金春宗家本の識語には、「今春太夫鎮喜≡花押≡」という、所蔵者であることを意味する署名がある。今春太夫鎮喜は、表章・伊藤正義『金春古伝書集成』(わんや書店、一九六九年。)の系図にはない名であり、禅竹以後の大夫が一時的に名乗った名前か、あるいは、禅竹以前の大夫、ということになる。『金春

古伝書集成』の系図は、三十七種の文献資料を参照して作成されたものであり、禪竹以後の大夫であれば、短期間の通称であっても、網羅している。したがって、今春太夫鎮喜が禪竹以前の大夫である可能性を考慮する必要がある。書写年代を考慮し、禪竹が金春大夫氏信と名乗っていたことは確実であるから、禪竹を除外すると、「今春太夫鎮喜」は、禪竹の祖父である金春権守か、父の弥三郎あたりを想定することができる。能と宴曲との関わりは、これまで作品研究ならびに音楽研究の視点から論じられることの方が多かったが、歴史的な関わりについては、資料が少なく、状況の把握が困難な状況だった。しかし、金春宗家蔵『宴曲集巻第一』が発見されたことにより、能と宴曲との関わりを、我々はこれまで以上に考究する必要がある。

「第三節 宴曲と天台の秘伝―〈三嶋詣〉の場合」では、永仁四年（一二九六）以前成立『宴曲抄 中』に撰集され、室町中期頃まで享受された作品である、〈三嶋詣〉について論じる。宴曲〈三嶋詣〉と天台関連資料、『仏神一体灌頂鈔』『三嶋大明神本地事』『溪嵐拾葉集』には、共通の理解がみとめられ、その関係性を考慮する必要がある。『仏神一体灌頂鈔』は、室町末期頃に書写された、天台の灌頂儀礼にも関わる神道書で、伝本の現存状況から考えても、天台の門から出たことがほとんどなかったと考えられる。金澤文庫蔵「三嶋大明神本地事」（外題、「神明納受法花事」）は、書写年代等不明であるが、『仏神一体灌頂鈔』同様、天台口伝の一つであると考えられる。このような天台の「秘伝」が、宴曲に反映されているということは、特筆すべき事で

ある。『溪嵐拾葉集』も、天台僧侶光宗によって記された書物であるが、その「鉄塔事」の条には、多種多様な「三島縁起」の存在があつたことが明記されている。その具体的な内容について、知るすべはないが、『仏神一体灌頂鈔』や「三嶋大明神本地事」の中の三嶋明神に関する記述に近いもので、その理解が、天台の秘伝として伝わり、その一方で、宴曲（三嶋詣）に反映されたと、考えられる。天台の秘伝が、中世の文学や芸能を生み出す基盤となったことは、先行研究において、論じられているが、それが宴曲の作品にも及ぶという指摘はいまだなされておらず、本論文は、その視点からの考察を試みた。伊藤正義氏が『宴曲上』（朝日新聞社、一九九六年。）の解題で述べたように、吉田東伍氏が掲出した「天台宗血脈」に明空の名があること、そして

早稲田大学本『撰要目録卷』と『溪嵐拾葉集』の内容が一致すること、そして、宴曲（袖志浦恋）（十駅）の作者頼慶が、天台の権少僧都であつて、宴曲作者明空とも交流があつたということ、以上の三点を考慮すると、明空の作である宴曲（三嶋詣）と、『仏神一体灌頂鈔』や「三嶋大明神本地事」のような、天台に伝わる秘伝の内容が一致すること、また、単なる同時代的理解を超越した影響関係を想定すべきである。さらに踏み込めば、宴曲作者明空を天台僧とする吉田東伍氏以来の説は、宴曲研究史上、再認識されるべきものであり、今後はそれを確認すべく、歴史的見地ならびに文学的見地の両側面から調査する必要がある。

「第四節 宴曲（三嶋詣）」に見る古典世界」では、（三嶋詣）の本文に修辭的に用いられた古典がどのようなものか、考察し

た。〈三嶋詣〉には、歌語、仏教語、日本記・縁起関連語、漢語と、さまざまな言葉が用いられ、その背景には多様な古典世界が広がっていることを指摘した。その古典世界はそのまま、作者明空の文学知識のありかたを反映させるものである。

「第五節 明治期における宴曲研究」は、吉田東伍（一八六四―一九一八）にゆかりのある文献資料を収める文庫である、吉田文庫所蔵の宴曲関連資料の調査に基づいた研究である。早稲田大学演劇博物館演劇研究センターの二十一世紀COEプログラム「演劇の総合的研究と演劇学の確立」のうち、古典演劇研究（能楽）コースでは、二〇〇四年度以来、竹本幹夫氏を中心として吉田文庫の資料調査に取り組んでいる。吉田文庫に所蔵される能楽資料のうち、歴史

的発見である松廼舎文庫本『三道』の影写本については、竹本幹夫氏による報告ならびに影印がある。調査は現在も継続中で、今後あらたな貴重な資料が確認される可能性もあるが、本節においては、二〇〇五年八月までに調査が完了した宴曲関連資料に基づき、明治の黎明期における宴曲研究がいかなるものであったか、吉田東伍の宴曲研究がどのようなものであったか、考察した。

「〈附録〉金春宗家蔵『宴曲集巻第一』」解題・影印・翻刻」は、本論文で取り扱った資料の中でも特に重要でありながら、いまだ単行本に収録されていない、金春宗家蔵『宴曲集巻第一』の全容を報告するため、に附したものである。

― 以上 ―